なお1958年春 前原勘次郎氏は肥後人吉産のオニコナスビの生品を送つて下つたので調べたところ，$2n=24$ の染色体をもつていることが分つた。この類で今迄に染色体の分つているコナスビでは $2n=20$ であり，また染色体の形・大さにも差がある。他の多くの種を調べてからでないと断定できないが，恐らくコナスビはこの類中で他種とはかなり異つたものであり，比較的に後に分化した種ではなかろうかと推察される。

(追記) 以上の原稿を準備した後で，金井弘夫氏は鹿児島大学農学部に本種のよい標本があることを通知して下つた。その産地はいずれも大隅半島南部の山地で，大根占，野首岳 800-900m (初島住彦 1952)，田代村花瀬 (内藤喬 1925)，稲尾岳 (内藤 1926，初島 1949)，辺塚峠 500m (初島 1956) である。ここに標本の閲覧を許された初島教授に深謝します。

□ St. John, H.: **Nomenclature of Plants** 157 pp. (1958) The Ronald Press Co., New York. $2.50.

著者は多年ハワイ大学で植物の命名について講義をした経験から，ここにその例題集ともいえる本書を出版した。命名について歴史的に面白く話をしても，実例について植物命名国際規約がどう適用されるかを示さなければ，規約の原則や内容は学生の頭にはいらない。うまく指導すれば学生も命名に興味をもつ様になると著者は考えている。それには法律を勉強するのに判例を学ぶように，命名上の実例について学生自身に論議させ解答させて教授が裁判官のようにこれを批判してゆく方法が最も効果的である。本書には命名上問題がある約 900 の実例があげられ，一組ごとに関係ある学名と原典が列記されていて，その中から正名をえらびだすようになつている。またそれを論議した文献があればそれも引用してある。第 2 章に規約の各条に該当する 188 例が集められ，第 3 章は隠花植物に関するもの，第 4-7 章には比較的難かしい例もふくまれている。日本植物に関する例もそこここに見える。しかし著者の見解による解答は，第1章に一例が説明されているだけで他は遠慮して載せられていない。従つて本書を利用する時の難点は，教える者がよほど命名に精通していないと活用し難いことであり，また一々原典にあたることのでき難い場合も多いと思われる。しかし難解な例をさけて適当に簡単な例をえらびだして教えてもある程度の効果は期待できる。

なお本書は Chronica Botanica, New Series of Plant Science Books No. 31 として発行され，丸善で扱つている。(原　　寛)